さらくなの里

友の会だより

第１６号　　２００７・春

撮影・塚田克巳

寄付で改修なったお稲荷さん

羽尾の瘡守稲荷（かさもりいなり）神社の屋根をこのたび改修しました。腐食が進んだ茅の部分をこれまでありあわせの材料で応急処置をしてきたのですが、茅葺き職人も減少しているため、銅板で葺き替えることにしました。

改修にあたっては二〇〇五年九月、別当からの羽尾四、五両主務区長宛の要望書を受け、昨年四月両区総会で承認された。この決定により宮本組の百万円を基に工事に必要な資金を寄付によることとし、両区の皆様方へ「趣意書」を配布した。その結果、二百六十八戸と企業十七社から六百七十万円が集まりました。工事の施行は長坂建設、施行協力は二見屋、工事監理はウエスト企画設計にお願いし、同年十二月下旬には工事が終わった。越年祭（二年参り）は銅板の輝きがまぶしい中で営まれた。改修工事の落成式を本年二月三日の節分祭に羽尾の明徳寺客殿にて行った。

瘡守稲荷神社の創建は古く、伝わる記録によると、鎌倉時代にはすでに武将によって修理されたといいます。正式名称は「正一位瘡守稲荷五社大神」で、伊勢神宮の外宮豊受大神と同じです。また、京都伏見稲荷神社から授与状（許可証）を賜っている由緒ある神社です。川中島合戦の時代に消失しましたが再建され、その後何回かの改修を経て現在に至っています。一時期、花街の芸者連の参詣が多く見られたと言われています。

今回多額の寄付を受けたことにより、当初の屋根改修にとどまらず、入口の大扉と内装の改修も行うことができ、大変きれいになりました。これを機に昔の盛況を取り戻したいと願っております。

（西沢正人）

縄文まつりに更級小全児童が参加

6年かけ地域の文化と人に触れる

第十四回縄文まつりが昨年十月二十九日開かれました。今回は更級小学校が初めて全校参加する記念すべきイベントでした。

「六年間でふるさとを学ぶ」という総合学習の中の一環に縄文まつりが位置づけられました。「ふるさと更級の自然や文化、伝統、人と人とのつながり」を学ぶ場として毎年、まつり当日の日曜日を登校日にし、全児童が、まつりの運営にも携わることになりました。

一年生は山川の恵みに感謝する豊穣儀礼で、学校の畑で栽培した緑豆で作った緑豆クッキーを奉納しました。二年生は堂の山で集めた松ぼっくりやドングリを材料に手づくりおもちゃの製作コーナー「ドングリ」広場を開きました。三年生は自分たちで集めたドクダミの薬草茶のコーナーを手伝だったほか、堂の山で集めた木の実を使った「ぼうけん広場」を開きました。

高学年の子どもたちは体験コーナーのお手伝いが中心。四年生は仮装大会に四チームを送り出してくれました。また、六年生はまつりの始まりを告げる鼓笛隊演奏、五年生は豊穣儀礼の主役を担いました。

全児童が参加した豊穣儀礼と縄文太鼓に合わせた踊り（写真）は、これまでにないスケールの大きなものになりました。まつりで着た縄文服の多くは米袋と絵の具で自分たちが作りました。

一年生はこれから六年間、毎年違った役割を担います。大人やお年寄りには地域の子の成長にかかわる役割と責任が生まれました。（大谷善邦）

前号でお伝えしました第15回縄文まつり記念出版の制作が順調に進んでいます。原稿がほぼ集まり、編集作業中です。今秋のまつりの当日には来場者の方にも買っていただく計画です。みなさんのお力添えをよろしくお願いいたします。

私もサナダムシをお腹に飼ってみようかな

カイチュウ博士が講演会

「カイチュウ博士」の異名を持つ藤田紘一郎さん（東京医科歯科大名誉教授）による講演会が三月四日、さらしなの里歴史資料館でありました。「共生の意味論―がんやアトピーはなぜ発生するのか」と題するお話に約百六十人が耳を傾けました。参加者のお一人、信州大学の医学生で須坂市にお住まいの**中島舞子**さんに感想文を寄せてもらいました。

世界で一番清潔な国は日本であると言われます。日本人のキレイ好きは、バイ菌＝病気という考えによるのでしょうが、果たして清潔＝健康なのでしょうか？。藤田先生のお話は、寄生虫と人間がお互い助け合って生きていくことの大切さを実感し、行き過ぎた清潔志向を見直すきっかけとなりました。

藤田先生が四十年前から研究に訪れているインドネシアのカリマンタン島では、今でも寄生虫がいる川で子供たちが泳いでいるそうです。ここでは川の水が食事や洗濯にも使われているのですが、アトピー性皮膚炎や花粉症といったアレルギーを持つ子供はいないそうです。一方、寄生虫を排除した日本では子供の三―四割はアレルギーを持っています。

私はウォシュレットトイレの愛好家ですが、あの気持ちのいい温水は人体を守るいいバイ菌たちも洗い流してしまい、逆にお尻が痛くなったりするそうです。藤田先生のお話に引き込まれ、いつの間にか私も藤田先生のようにサナダムシをお腹に飼ってみたい、と思うようになっていたのでした…。

私も藤田先生のような医師を目指す医学生の一人なのですが、歴史資料館の荒井君江さんのご紹介で東京医科歯科大学を訪れ、藤田先生にお会いする機会がありました。藤田先生の研究室では、先生のお腹の中で育ったサナダムシのキヨミちゃんが飾ってありました。とても優しくてユーモアいっぱいの藤田先生、楽しいお話を本当にありがとうございました。

須坂遺跡の突先に大邸宅？

千曲川面前、地の利豊か

須坂地区に防火水槽を設置するのに伴い、更級保育園北約百五十メートルに位置する、市職員福島修氏宅地内の庭（須坂一〇二番地一）を発掘調査した。遺跡地図では、遺跡の密度があまり高くない散布地として登録されていたが、発掘調査をしてみると、いろんなものが発見された。

出土した遺構（住居や建物の跡）は上から順に、柱の下に敷石をした礎石柱建物址一棟と、穴を掘って柱を埋め込んだ掘立柱建物址四棟、さらに床全体を掘り下げた竪穴住居址一棟である。

一番上にあった礎石柱建物址の礎石は、とても立派なものであった。大人三人掛かりでも持ち上がらない。礎石が大きいということは、当然その上に建っていた柱も規模の大きなものであったことが容易に推察される。大邸宅か。

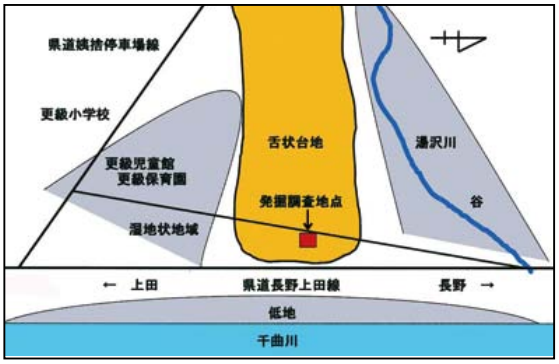
礎石の周囲は地面が叩き締められ土間状になっていた。この土間が幸いし、その下に眠る掘立柱建物址と竪穴住居址の遺構がパックされて守られていた。掘立柱建物址は中世のものとみられる。このほか石器や土器などの遺物も発見された。遺物は縄文時代から弥生時代、平安時代、中世にまでわたるものであった。出土遺物から近くに縄文時代や弥生時代の生活跡も眠っていることが推察される。

過去に更級児童館建設地と同館への取り付け道路部分（更級保育園北側）の発掘を行ったが、数片の磨耗した土器片しか出土しなかった。児童館より東方に行くにしたがって湿地状から谷状の地形になっており、居住地ではないことが確認されている。

一方、今回の調査地より北に五十メートルほど行くと、急激に湯沢川に向かって下っている。

このことから、調査地点周辺は、かつて南側と北側が帯状に低く、また、東側は千曲川によって端崖となっているので、東西に長い小規模な舌状台地であったことが分かる。現在の景観とは、大きく異なっていたのである。

遺跡には、各時代の人々が何度も住みついているので、台地が安定していたことがうかがえる。漁労、周囲の低地利用（水田）、砂鉄の採取のポイントであった可能性もある。天然の要害に囲まれた要塞的要素（千曲川対岸の眺望も良好）もある。地籍名が「本郷」である点も見逃せない。それぞれの時代の人々は、千曲川に向かって突出したこの台地に、地の利の何を狙って占地していたのであろうか。



今回の発掘調査は三メートル×九メートルの小規模な範囲であったので、全貌を確認できなかったのが残念である。今後は発掘調査の記録や出土遺物の整理を行い、分析を進める予定である。

（さらしなの里歴史資料館学芸員・翠川泰弘）

塚田哲男さん逝去

さらしなの里友の会副会長で郷土史研究家の塚田哲男さんが五月二十三日、逝去されました。

塚田さんは昭和二年生まれの七十九歳。友の会の設立、縄文まつりの運営に多大な尽力をされました。更級村初代村長の塚田小右衛門さんらしなの里の歴史の掘り起こしの功績など、に生涯を捧げられました。本誌の「おらほの冠着」では冠着山にまつわる多様なエピソードをユーモアもまじえながら紹介してくださいました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

おらほの冠着 16

雅丈さんの冠着山復権運動

元禄元年（一六八八）年、俳人の松尾芭蕉が千曲市八幡地区の長楽寺を訪れてから、文人たちは姨捨山は長楽寺付近と思うようになり、俳句や和歌にしました。

古代から中世にかけて姨捨山は冠着山のことと文人たちの間で思われていましたが、戦乱の絶えなかった戦国時代、詩歌の文化が衰退する中で、そうした認識も薄まっていたせいもあるとみられます。

しかし、明治になって羽尾地区の酒造家、塚田雅丈（小右衛門）さんは現在の信濃毎日新聞社に「真の姨捨山は冠着山ナリ」と題する長文の投書を送り掲載されるなど、冠着山の復権運動を起こします。雅丈さんは初代更級村村長です。東京から多くの学者・文人の支援を得て取り組みました。

中でも加賀百万石の支藩、大聖寺藩出身の大島浮名は、最も熱心な協力者でした。六十一歳のとき当地にやって来て、地元民に和歌や剣道、押し花を教える中、雅丈さんと一緒に発起人となり、冠着山への参道を村人の力を得てつくりました。また冠着宮を再建して、いつでも参詣できるよう羽尾地区の郷嶺山山頂に里宮として観月殿・冠着山遙拝所をつくりました。その大部分の経費を雅丈さんが出したそうです。

その後、幾多の文人たちが冠着山、郷嶺山を訪れて詩歌を残し、冠着山が姨捨山でもあることが全国に知られるようになりました。雅丈さんはその偉業を賛して大島浮名夫妻の歌碑（上の写真）を郷嶺山に建てました。

いにしへの月の都を人とはば
雲井にちかき姨捨の山（大島浮名）

世の塵を払いつくして清かなる
さらしな山の月にならはむ（妻志づ）

（大橋静雄）

〈編集後記〉 縄文まつりが今秋、十五回目を迎えます。この節目に当たって記念出版事業に取り組んでいます。主体は、更級小学校を含め縄文まつりを支えて下さっているみなさんをまじえた「友の会だより拡大編集委員会」です。

記念出版を決めたのは、更級小が昨年の十四回から、まつり当日を運動会のように登校日とし、全校児童が参加するまつりと位置づけたことが大きな弾みになっています。

本には、さらしなの里が古代から歴史と由緒のある場所であることをはじめ、縄文時代の里の様子、なぜこの里に縄文まつりが根付いたのかなどについて考察する文章も盛り込みます。さらしなの里マップも掲載し、当地を訪れた人たちのガイドブックにもなるようにしたいと思っています。更級小からも先生と児童の文章が寄せられています。

制作費は本の売り上げでまかないます。遠方のご親戚や知人への贈り物にもなるよう仕上げたいと思っています。郷土史研究家でいらした塚田哲男さんに出来上がったものをお渡しできないのが残念です。

編集・発行
さらしなの里友の会だより編集委員会
事務局　さらしなの里歴史資料館
〒三八九-〇八一二
長野県千曲市大字羽尾二四七の一
電話　〇二六（二七六）七五一一
ファクス　〇二六（二六一）四一六一